

幼児の教育

家庭-保育所-幼稚園

1998
3

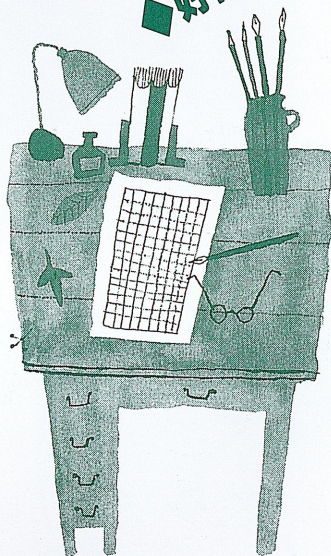


倉橋惣三 保育へのロマン

荒井 洌・著

「倉橋は決して古くない」。日本保育界の巨人・倉橋惣三の思想・理論を現代保育の現場に生かす道を明らかにした注目の本。月刊誌「保育専科」に好評連載されたものを中心に書き下し部分を加え、明日の保育現場で使えるように、分かりやすく的確に倉橋理論を解説します。

■好評発売中

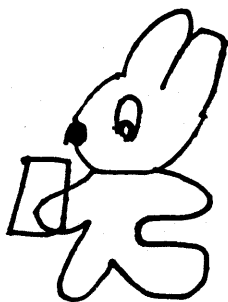


A5判・220頁・定価：本体2,000円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第97巻 第3号

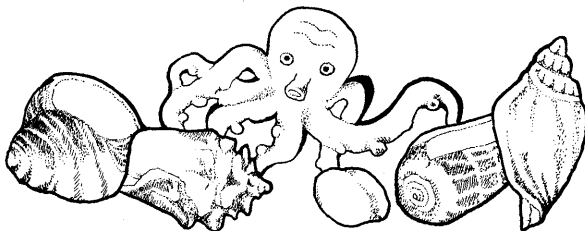


幼児の教育 目次

— 第九十七卷 第三号 —

© 1998
日本幼稚園協会

「児童の世紀」を振り返る—その六—	……………	本田 和子	〔4〕
震災後の子どもたち(19) 巣立つ子からの贈り物	……………	森末 哲朗	〔13〕
二十五年ぶりの教育実習			
—イギリス公立幼稚園保育参加願末(1)—	……………	豊田 一秀	〔20〕
子どものいる暮らし—男・夫・父			
子どもを育てることと研究することの間	……………	無藤 隆	〔26〕
門の内に入って来られない子ども			
—内と外の間を揺れ動く心—	……………	津守 真	〔32〕



ある日の育児日記から⑧……………佐藤 和代…(39)

心の動くままに遊べるようになるまで

— A との長い道のり……………伊集院理子…(40)

滄桑の街・香港から(4) ハロウィーンと運動会……………今井 七重…(49)

夢の日々(四) 二人で入園し、三人で卒園(三)……………大多和 檀…(54)

子どもの本から おつきさまにとどくぐらいすき……………仲 明子…(60)

表紙絵／佐藤 寛子

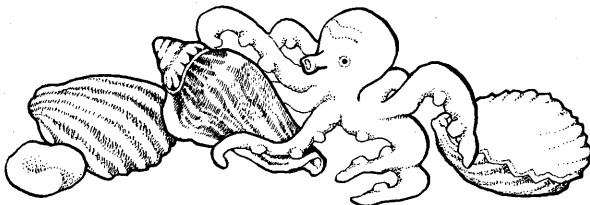
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「水そうの底」

編集委員／田代 和美・吉岡 晶子・上坂元絵里

編集部／仲 明子



「児童の世紀」を振り返る

その六

本田 和子



パラダイムの転換と子ども学

幕進する工業生産が公害という新たな社会問題を発生させ、過剰なまでの上昇志向が徒に競争を激化させて人心を蝕む。一九六〇年代後半は、豊かな社会を追い求め続けた結果が、様々な問題を露呈し始めた時期でもあった。「進歩は、果たして絶対的な善であり得

るのか」という素朴な疑問が呈され、より速くより便利にと、ひたすらにゴールを目指して直線的に流れ続けた時間を円環状に回帰する時間と対比させつつ、改めて「進歩」の意味が問い直されもした。

こうした状況下で、知の世界にも新たな波動が起こり始めていた。例えば、ニュートン力学の限界が指摘され、あるいは、進化論の誤謬が云々される。万有引

力の絶対性やダーウィン流進化論の基盤の上に成立していた今世紀の知性が、根底から揺すぶられ始めたのであった。それらを総括して、二十世紀的知の枠組みが解体し新たな枠組みが要請される時期、すなわち「パラダイムの転換期」の到来と把握することも可能だろうか。当然のことながら、その動きは自然科学の分野に止まらず文科系の諸学にも波及した。というより、自然科学系諸学におけるそれが、実際の・個別の研究における不可避の理論更新であったのに比し、文科系諸学のそれは「転換」という動きそのものに対するより鋭敏な反応と言わなければならない。そのゆえに既存の知的枠組みへの挑戦とそこからの脱皮が、新しい課題として浮上してきたのであった。

ところで、こうした転換期、極言すれば知的世界の激動期とも言うべきこの時期に、「子ども学」が選択したのは、どのような方略だったのだろうか。私どもは、二十世紀が、「児童の世紀」という華やかなキャッチフレーズの下に開幕したことを知っている。

しかも、それが、進化論に立脚した人間観・子ども観を基盤とし、「進化⇨進歩⇨発達⇨善」であることを疑わない向日的な心性に支えられたものであったことにも気付かされている。つまるところ、この世紀が「子ども」に注いだのは、「進歩発達する可能態としての子ども」へのまなざしであり、彼らを巡る処遇は、その可能性を開花させ、みずからの期待を実現化するためのもろもろの対策であったと言えよう。

とすれば、この基盤の揺らぎに対して、「子ども観」も「子ども関係の諸種の営み」も、大幅な更改を迫られざるを得ないだろう。しかし、とは言うものの、子ども関係諸学におけるパラダイムの転換は、事々しくは話題とされず、かつ、必ずしも時代的意志をストレートに表現する形では動いてこなかったかに見える。なぜなら、子ども関係者たちや教育者たちの間からは、「発達は必ずしも善ではない」という反省や、「発達しないものの価値を見いだそう」という提言は、皆無とは言わぬまでも、さほどの注目を浴びる

こともなかったように見えるのだから。例えば、障害を負う子どもたちの周辺から起こったこれらの眩きは、果たしてパラダイムの転換期を告げるカルチュールショックとして受け止められたのか、否か。

しかし、こうした基本的な問いとは無縁なままに、斯界は、新動向の余波に洗われ、随所で相応の変化を示し続けてもいる。そこで、この不鮮明な関係と、この間の経緯を、今回の課題として振り返っておきたい。

「構造論議」と底流としての「構造主義」

教育界に「構造」を問う声がしきりとなった時代がある。一九六〇年の終わりがごろだったろうか。義務教育の構造はどうあるべきか、あるいは、それぞれの学年の教育内容はいかなる構造から組み立てられるべきか、など、構造論議が斯界を賑わしたのであった。私どもの周辺でもその声はしきりであって、保育学会のシンポジウムのテーマにも取り上げられ、保育内容の

構造を「遊び」と「課題活動」の二本立てにすべきか、もしくは「仕事あるいは作業」を加えて、三本の柱から考えるべきかなど、論議が戦わされたこともあった。



これらの場合、保育の「構造」として取り出された「遊び」あるいは「課題活動」に関して言えば、それらは「実践の世界」そのものとしてではなく、「観念の世界」の考えるに適した記号として抽出されていたのだが、これら構造論議に関するメタ構造論、すなわち、この理論のよって立つ基盤そのものを問う試みを欠いたまま、ただ、実践を支える主要素の抽出とその組み合わせが試みられたのが、当時の現実であったと言い得る。

言うまでもなく、「保育という現象」は、時々刻々推移し変転する成員個々あるいは彼ら相互の活動と、

瞬間瞬間に彼ら行為者によって付与される意味と、その意味によって生起される新たな活動の継時的展開として捉えられよう。しかし、それらが観念の土俵に乗せられ、思考する者たちによってその意味が確認されようとするとき、そこでは何らかの記号化が不可欠となる。そして、この当時にあっては、記号化された現象の内的法則が求められることになり、結果として、その時々の実践である保育現象を、「遊び」と「課題活動」の二項、あるいは他の何かを加えた三項によって、体系化し法則化しようという試みが生まれたのであった。

ところで、率先して構造化に意欲を燃やした教育関係者たちの多くが、集団主義者であったり社会主義圏の教育にシンパシーを抱く人々で、多少なりとも「社会派的」傾向の持ち主であったことは、改めて振り返る視界に興味深く映じてくる。マルクスが、人の生きる現実を実践の世界と観念の世界との二相に分ち、

前者を下部構造、後者を上部構造と呼んだことはよく知られている。そもそも人間社会の集合表象内に見いだされるある規則的な体系性に着目し、それを「構造」と呼ぶことを試みたのはマルクスであったと言われている。とすれば、マルクスは、構造論の本家本元と言うことも可能だろうか。となれば、社会派色の濃い理論家たちが、教育界に「構造」概念を導入したとしても何ら不思議はない。

しかし、これらの人々の「構造」に寄せられた関心は、単に、彼らのマルキシズムや社会主義体制への関心を示すものだけとは言いがたい。むしろ、彼らの「構造」への関心は、世界の「構造的把握」を促進して止まない大きな流れが、時代の心性の底流としてうねり流れ始めていて、その流れに促された結果と言えないだろうか。なぜなら、進化⇨進歩⇨善という図式が解体されたとき、世界は、「進歩」という唯一の価値を目指して直進する運動体であることを止めた。と同時に

に、「進歩」という目標に向かって努力する意志的・理性的主体とされた人間は歴史のなかに溶解し、輻湊する様々な要素間関係のなかで多元的な方向性のもとに再編成される運命を享受せざるを得なくなったのだから。

結果として、近代の作り出した人間を理性的主体と措定した上での人間中心の知的体系に疑義が呈され、人は自然や未開、あるいは無意識・感情・感性などの非理性的なもの、克服と否定の対象とされてきたあらゆるものたちとの間に、改めて新しい関係を結ぶことを余儀なくされたのであった。換言すれば、それは、他者として差異化され、そのゆえに排除されたものたちを理解し、その価値を認めて共存することが、新しい命題として迫り出してきたということでもある。

もちろん、当事者たちが、こうした心性の変化に自覚的であったと言うのではない。もしかしたら、彼ら自身は、これらの新しい課題を、実践から見いだされた必然と見なし、閉塞的な現場の突破口と受け止めて



いて、知の世界に発生したこれらの動きと連動していることなど、気がついてすらいなかったかも知れない。しかし、単に教育の分野だけに限らず、知の世界

一般に蠢き始めていた他分野の動向をも視野に入れるなら、教育界・保育界に起こったこの構造論議も、同じ大きな潮流の上で考えられることが至当であろう。

例えば、一九六〇年代、文化人類学が人々の視野に目に著しい鮮明さで浮上してきている。しかも、それは、従来のように、未開社会の探求によって単なる新奇なものへの好奇心だけを刺激する、エキゾチズムの学であることを越えて、広く知の世界一般に援用可能な法則源として浮上してきたのだった。それらは、かつての哲学や神学に代わり、文科系の知の世界の王者の座につこうとしつつあるかに見えさせた。そもそも文化人類学とは、高度な文明を発達させた西欧諸

国が、未開社会という対極にある異質な他者に理解の
鍵を入れようとする企てであつてみれば、この動き
は、けだし当然と言うべきであらう。

周知のように、文化人類学が、レヴィ・ストロース
他の活躍によつて、その主流を機能主義から構造主義
へと転換させつつあつたことも、この動きを支え促進
するものとして働いている。すなわち、レヴィ・スト
ロースらの人類学は、未開社会を非文化とみなしてそ
の啓蒙を意図する植民地主義を批判し、未開社会の神
話的思考は、西欧近代の科学的思考と劣らぬ「具体の
科学」であり、効率を求めて栽培化された思考とは異
なる野生の思考であるとして、近代西欧社会を根底か
ら批判する立場を取つた。そして、これらの主張と提
言は、近代西欧文明がようやく閉塞的状况に陥り、進
歩という価値の絶対性が揺らぎ始めた当時にあつて、
新鮮に人々の意識を刺激し、かつ、依拠するに足る新
しい基盤として、人々の無意識に浸透し始めたと言え

よう。

それは、理性的人間とその営為を絶対とする人間観
・世界観の解体であつた。代わつて出現したのが、人
によつて生きられる現象は、単に、理性と、その所産
としての合理的意志だけを前提として考えられるべき
ものではなく、理性の排除したもろもろを含めて、無
数の要素とそれら要素間の関係として分析・説明され
ねばならないとする、新しい人間観・世界観だつたと
言い得よう。

児童心理学のパラダイム・チェンジ

心理学の世界で、みずから「構造」という用語と概
念を使用し、それに依拠しつつ発達現象の解明に努め
たのが、今世紀最高と称された発達学者、J・ピア
ジェであることはよく知られている。改めて繰り返す
までもないが、ピアジェが生涯に達成した業績は、お
よそ、三つの時期に区分して把握されると言われて

いる。一九二〇年代の前期研究においては、彼の関心は、子どもの言語・判断と推理・因果関係、あるいは世界観など、大人と異なるその独自性を指摘し、意味を考へることに置かれていた。現代風に言い換えるなら、「異文化としての子ども性」の研究と言うことも可能だろうか。その後の三十、四十年代は、乳児の知能の起源および、幼児・児童の認識の基本的概念とその発達に向けられ、五十年以降の後期は、発生的認識論の構築に注がれた。中期以降、とりわけ後期の研究には「構造主義的」思索の影が濃く、六八年には『構造主義』と題される論稿すら発表されている。彼は、言明していた。「△構造√の概念は、今世紀の科学に對して大きな認識論的な意味を持っている。構造主義的な思潮は、言語学や人類学にとどまらず、数学、心理学、生物学等にまたがる学際的な潮流なのである（一九七〇）」。

ピアジェの前期研究に、レビ・ブリュールらの未開社会研究との類縁性を指摘することは容易であろう。



例えば、レビ・ブリュールが、未開社会の「前論理的思考」を西欧文明社会の合理的思考と対比させて把握しているが、ピアジェもまた、子どもに顕著な「前論理性」を、大人と子どもを分かち説明概念として用いているなど、その時代的共鳴を示す例と見られるのではない。そして、知能の発達を「同化」と「調節」の両者の働きと捉え、この両者の回路を「構造」として把握するのが五十年代であった。環境に自己のパターンを押しつける「同化」と、環境の圧力に対して自己を変形させる「調節」、この両者を弁償法的に運動させる構造こそが、人が世界に対するときの知的な在り方を決定するのであり、換言すれば、人の行動はすべて構造化されていると言うのである。

ピアジェ思想の構築に際して、レヴィ・ストロースらの言動がどのような影を落としたのか、あるいは、

また、ソシュールら構造言語学の理論的影響がどの程度のもだったかを、明らかにすることは私の任ではなく、また、ここではその余裕もない。しかし、先に引用したピアジェの一九七〇年の論稿中の「言語学や人類学にもとどまらず」という指摘にも見られるように、五十年代のフランス知性を活性化したのが、人類学や言語学に代表される「構造主義的」な分析視点であったことは事実であろうし、彼自身もまた、その動きと無縁ではなかったことも確かであろう。

ところで、わが国の場合、一九三〇年代に、初期ピアジェの紹介は、若きフランス学者波多野完治によってなされていたにもかかわらず、そのピアジェが、児童心理学・発達心理学者として教育界に絶大な影響力を發揮するようになるのは、一九六〇年代の終わりころであった。「同化」と「調節」という分節化とその弁償法的展開という発達観が、新しいキーワードとして関係者を捉え、彼の試みた知的発達に関する諸実験と結果として抽出された諸法則が、新しい教育方法の

基盤とされる。「象徴機能」やら「保存概念」やらと、新規に導入されたピアジェ用語と概念が、関係者たちの間を飛び交ったのもこのころと言えよう。

教育実践と心理学との不可分の熱い関係は、二十世紀的現象である。教育が、科学を根拠とし、その方法も科学的であらねばならないとするのは、先に見たとおり、エレン・ケイの主張でもあった。今世紀初頭のアメリカ合衆国を席卷した「進歩主義教育」も、特定の誰某への信仰的帰依にまして、科学的児童研究に依拠することの必要性を強調し、科学的心理学と手を結ぶことで新しい改革を成し遂げている。わが国の場合も、遅ればせながらとその後を追った。そして、半世紀余の間に、科学的心理学は子どもとの教育とその研究に関して、王者の位置にいたのである。パラダイムの転換期に当たる六十〜七十年代にかけても、この関係は変わっていない。しかし、王冠をゆだねられる心理学者は、時代のうねりのなかで交替させられ、戦前のドイツ系、あるいは戦後のアメリカ系の児童心理学

者たち、例えばゲゼル等に代わって、構造論者のピアジェがその椅子に座ったのであった。

マーガレット・ミードが、学問研究と文化の関係を論じた論稿のなかに次のような一文がある。すなわち、「研究者は、自分自身が属する文化の諸前提にしばられているため、特定の問題だけを問い特定の観察だけをおこなう傾向をもつ」と……。そして、ゲゼルの子ども研究がアメリカの親たちに受け入れられた経緯を以下のように論じる。「この書物は、子どもが発達する際の実際の姿を母親に知らせる手引きだったはずなのだが……それとはちがった使われ方をしてしまふ。アメリカ人の母親は、自分が母としていかにうまくやっているかを確証したが、自分の子どもを比較し他人の子どもを評価するめやすとしてこの手引き書を使うようになった」。

ゲゼルがこのように使われた動機として、彼女が指摘するのは、今世紀半ば頃のアメリカ社会を席卷した「子ども崇拜」と、それに促された「育児讃歌」で

あった。子どもが称賛に値する存在であり、育児が楽しんで享受さるべき悦楽であるという当時の思潮が、育児の成功度を測定する指針として、心理学者たちの発達研究を促進させたと言っているのである。世界中でもっとも多く研究された集団は、アメリカの子どもたちであり、彼らを対象に行われた子どもの行動や発達に関する研究が、他国の子ども研究や子ども理解を決定づけたとは、H・B・シュワルツマンの見解であった。

わが国も例外ではなく、アメリカで試みられた児童心理学や育児研究の成果を、直接・間接に継承しつつ、この時期の子ども研究や育児や教育の実践を遂行してきた。しかし、ここで触れたように、ゲゼルらに代わって浮上してきたのがピアジェの構造主義であったとは……。『子ども』という眼前の生身の実体に接近し理解するための理論ですら、所詮、時の文化の大きなうねりから無縁ではないと言わねばならない。

(聖学院大学)

震災後の子どもたち(19)

巣立つ子からの贈り物

森末 哲朗

この原稿を書いているのは、一九九七年の十一月。あの大地震から数えて、二年と十か月になる。「もう、二年十か月か」とも思えるし、「まだ、そんなものか」とも思えるが、とにかく三年近くの時間が流れたことは確かだ。

振り返ってみると、激震のために屋根に穴があき、全壊してしまったどんぐりクラブの建物を再建するために、丸一年の時間を必要とした。その

一年間は、近くにある都賀川公園の「テント村」の中で、被災者のおっちゃんやおばちゃんたちのテントの並ぶ中で、「テント学童クラブ」の生活を余儀なくされたものだ。

かろうじて「生き残った」家具たちは、友人宅の庭で青いビニールシートにぐるぐる巻きにされ、「春」が来るまで冬眠することとなった。狭いテントには、生活する上で最低限必要なものだ



けを運び、できる限り身軽な状態でいることが、あの当時の暮らしの知恵だった。

非日常の日常化

長い長い一年の間、再建委員の人たちは、安藤隆子さんや大西宏さんを中心に東奔西走し、ようやく元の場所に念願の新居が建ち上がった。これには、家主の森分一寿さんの理解と厚意が、何よりも大きな掩護射撃になったことは言うまでもない。

ところがこのぼくはといえば、一年の間にテント生活という「非日常」が日常化してしまい、新しい建物にはすぐには馴染むことができないでいた。バイクに乗って自宅からどんぐりクラブに向かった筈なのに、着いたらテント村だったという笑えない話が何度か繰り返された。こんな間抜けな奴は自分だけかと思っていたら、「おっちゃん、今日なあ、知らんまにテントに行っても



◀緑色のテントの中で

た」と、学校から帰ってきた子どもが笑いながら話してくれたことがある。

「なんや、お前もか」と、妙に嬉しくなってしまう。

建物というハード面での「復興」はできても、頭や手足は昨日までのことをよく憶えていて、まともな建物で暮らすことの方が「非日常的」だったのだ。

春夏秋冬をくぐって

冬眠中の家具たちが、総二階建ての新居に戻り、子どももほくも道を間違えなくなるのに何週間かの時間が流れた。

「家の中にトイレがある！台所もある！」

当たり前のことがやけに嬉しかった。そうして、トイレや台所があることが、当たり前のこととして特別な感激を伴わなくなるのに、何か月の時間が流れた。

日常というものが、音もなく流れるようになるには、春夏秋冬を最低一度はくぐり抜け、それまでの一年との違いを噛みしめることが必要なのだろう。

テントの中では、大風が吹けばそれはそのままザワザワしたおぞましさを運んでくる。

雨が降れば、テントシートを叩く雨音が部屋中に響く。

「窓を閉めて、ドアも閉めたら、ここは静かやねえ」

台風の季節には、そんなことがしみじみ感じられたものだ。

新居で四季を迎え、流石に二年目に入ると、ことあるごとに「テントでは、こうだったねえ」と比較することが少なくなっていた。

巣立ってゆく恵介

新居での二年目も半分以上が過ぎた九月のある

日、六年生の恵介がだしぬけにこう言った。

「おっちゃん、あの、ワリバシで作った写真の額、もう作らへんの？」

ソーメンの木箱を電動糸ノコで裁断し、それを台にしてワリバシをポンドで貼りつけ、それに色ニスで彩色した手造りの写真の額のことだ。地震がくるまでは、毎月の誕生会のたびに、気に入った写真を入れて子どもたちにプレゼントしていたものである。

恵介は、「楽しみにしとってんけどな」と言う。考えてみれば、地震に襲われた一九九五年の一月十七日当時、彼はまだ小学三年生だったのだ。幼さの抜け切らなかつたあの頃と比べれば、ガッシリとした体つきに変わった「少年」の恵介が目の前にいた。

……もう、六年生なのだ。彼はあと半年もすれば小学校を卒業し、同時にどんぐりからも巣立っていく。残すところあと半年なのだ。

ぼくには、彼が残された時間の中で、どんぐりというもののイメージを結晶させようとしているように映った。そんな想いを持った子どもの前では、怠惰でいる訳にはいかない。

「お前が卒業するまでに、全員の額、作つたる」そう応えてしまった。

みこしをあげたら？

十月のある日、また、恵介が言った。

「おっちゃん、もちつき、やらへんの？」

ぼくの予感ほ、どうやら当たっていたようだ。あの大地震以降、どんぐりは大きく変わったのだが、恵介にとってはどんぐりがどんぐりである限り、これとこれとこれは「復活させろ」というイメージがあるようなのだ。

それを「結晶」と言い換えてもいいのかもしれない。

もちつきもそのうちの一つなのだなと合点が

いった。

子どもという生き物は、過ぎ去ってしまったことはたちまち忘れさってしまうという特技をもっている。そのくせ、印象の濃かったものは、いつまでも忘れずにいるという生き物でもある。地震の前までやっていたことなど「もう、忘れた」と言われても仕方のないことなのだ。それを恵介は「もちつき、やらへんの？」と迫ってきた。やっていた最中は、

「果たしていましていることが、子どもの心と身体に刻まれるのだろうか？」と、自信がなかったのだが、こうして迫られることで確信を得た気がして、嬉しくなった。

年に一回、親子総出で百キロを超えるもちを三年間（地震まで）つきあげてきた。それが、恒例行事となっていた。冬の風物詩として、子どもの脳裏に刻まれるといいなと思ったことを憶えている。

また、月に一回、どんぐりの小さな庭で、つきたてのもちをそのままおやつとして食べようというところで、月例行事としてのもちつきも十年間続けてきた。

超消費社会ともいべき現代の暮らしの中で、子どもたちが安易に消費者になってしまうことへの抵抗という意味が、おやつとしてもちをつくことの中にはあった。

おとながついたもちを、子どもに食べさせてやるのではなく、子ども自らがキネを持ち、非力でも全員で力を合わせれば、十分に食べるに値するもちがつけるといふ体験をさせたいという意味もあった。

もちに手水をつけたり、ひっくり返したり、手返しの役を買ってでる子も現れ、技術



の習得という意味も、年に一度ではなく「月に一度」ということの中にはあった。

ピカピカの一年生として入所してきた恵介は、一年生の時には十回ついた。二年生になって、二十回ついた。三年生の時には、三十回ついた。学年かける十という回数を、ひとつの目安として、小さい子は小さいなりに、大きい子は大きいなりに、全身の力をふりしぼってついたものだ。

地震からこっち、つまり恵介が四年生と五年生の時の丸二年間、月例もちつき大会は復活できなっていた。

テント生活中は、物理的に無理だったところもあるのだが、新居に戻ってからはやろうと思えばやれた。ところが、何もない中で暮らしたテント生活の中で、どうやらぼくの身体の奥の方に「その日暮らし」ともいえるべき怠惰が根を下ろしてしまつたようだ。ドサクサの最中は、実際、その日その日をどう暮らすかということしか考えら

れなかつたこともあるにはあったのだが……。

新しい建物もでき、「復興」なつたのだから「サア!」とばかりに走り出せば格好が良い。しかし事實はその逆で、急にどこから湧いてくるのかと思う程の怠惰と億劫さに支配されてしまつた。かろうじてその日その日のことはこなせても、まだ芯のところが起きていない、そういう感じを引きずっていた。

「事情はわからんこともないけど、オレ、もうじき卒業やねんで。ええかげんに、みこしあげたら?」

恵介はそんなことは言わなかつたけれど、ワリバシの額といい、もちつきといい、実に優しく、実にいいタイミングで、ぼくがみこしをあげやすいように手伝ってくれた気がした。

「震後」の途上

十一月一日、二年十か月ぶりに「月例もちつき

大会」が復活した。

物置きの間で眠っていたお釜やセイロやキネたちが眼を覚ました。

庭で雨ざらしになっていた石ウスが、タワシできれいに磨かれた。

二十人余りの子どもたちがそのまわりをとり囲む。手返し役を買って来た恵介は腕まくりをしている。一年生から順にもちつきを始め、順番待ちの子どもたちが「ひとつ、ふたつ」と、応援歌のように数を数える。

重いキネが振りおろされ、次にまたおりてくる間に、恵介の手は機敏に手水をつけていく。彼の手を見ていると、「おっちゃん、どんぐりは、こうでないとかんで」と語りかけられているような気がした。

学童クラブという場所には、教科書もマニユアルもない。何をして、何をしなくても、一日一日は過ぎ去っていく。知らないうちにアナーキー

な子どもたちの吹き溜りになる可能性だって無いとは言えない。地震によって一度はゼロ地点に立たされたどんぐりが、それまでの何かを捨て、これからの何かを創っていくその途上を、子どもたちもぼくもいま歩いているのだ。あの厳しかった「震後」の時間を一緒に歩いてきたという意味では、恵介とぼくとは「戦友」なのかもしれない。その戦友に、最後の贈り物と考えたぼくは、どうやら自分が勘違いをしていたことに気づかされた。

「どんぐりは、こうでないとかんで」という彼からのメッセージを、ぼくの方が贈られていたのだ。

あと半年足らずでここを巣立っていく恵介に、どんぐりの「結晶」とはどんなものなのか、大慌てで教えてもらうことにしよう。

(六甲学童保育所どんぐりクラブ指導員)

二十五年ぶりの教育実習

——イギリス公立幼稚園保育参加顛末(1)——

豊田 一秀

朝九時、子どもたちは親に手を引かれて、三々五々、ここブルークラスの部屋にやって来る。入口近くのテーブルには子どもの名前を書いたカードが置かれていて、母親は子どもにスペルを示しつつ、自分の子どものカードを教えている。カードはテーブルに立てられた二つ折りのボードのポケットに差し込まれ、出席の印になる。

母親にお別れのキスをして、すぐに皆の座っている方に行く子、なかなかサヨナラのできない子、色々である。先生はにこやかに子どもたちを受け入れ、無理に親から離すようなことはしない。親も無理に子どもを部屋に残して帰ってしまうようなことはない。ぐずる子を抱いて他の親や先生と話をしたりしている。先生、親、そして子ども、誰もあまり

急いでいないようで、穏やかな朝の風景である。

ここは、ロンドンの南西約五十キロに位置するギルフォード市の公立幼稚園 (State Nursery School) である。ギルフォードは人口十二万三千人程の美しい街で『不思議な国のアリス』の作者、ルイス・キャロルの住んでいた街としても知られている。

一九九七年九月より、私はこの幼稚園の保育に参加することを許された。週に一回程の参加であるが、イギリスの幼児教育の実際を知る絶好の機会である。

こちらに来てから、これまでも色々な幼児教育の現場を見る機会を持ったが、それは大体に於て一日のみの「参観」であったので、こうして保育に定期的に「参加」できる機会を与えられたことは私にとって大きな喜びであった。

保育に参加するに当たって、私が第一に大切にしたいと思った事、それは丁寧に体験するという事である。私が見た事、聞いた事、触れた事、した事、された事……等々をそのままに、しかし、きちっと感じ、思い、そして心に留めたい。これは当たり前のようにできてなかなか難しいことである。自分の心を自由に保ちつつ、その場に真剣に誠意を持って臨むことが、この事を可能にする一つの方法であろう。心を自由に保つとは、私の場合、自分の過去の経験から自由になろうとする事、自分を肯定し過ぎないよう、否定し過ぎないようにする事などを含んでいる。

日常の保育を共に行う事を通して、子どもや現場の先生たちと仲良くなり、相互理解を深めて行くこと。その過程自体の中に大切な宝が隠されているように思う。

第二に、そこで得た体験を「体験した自分」をも

含めて考え直してみることに——自分は何故そのように応答したのだろうか、何故そのように感じたのだろうか、又、何故何も感じなかったのだろうか……。すなわち、自分を観るもう一人の自分の目を通して、自分の体験を省察してみることに。この過程を通して、私の「気付き」は自分自身に対する気付きにまで迫ることが出来るであろう。

私はイギリスの幼児教育の考え方、問題点、制度、社会的認知、教師の持つ価値観、さらにイギリス人の子どもの育て方などに興味を持っている。これらの事を調べる方法は色々あるに違いないが、私は大学で学ぶと同時に、教育現場に参加するという方法の中から洞察を得たいと考えている。教育の現場という所は実践の場であり、いつも忙しく、現実的問題に溢れ「理路整然」としている場所ではない。しかし、教育問題の最前線に身を置いてこそ見えてくる問題もまたあるはずである。例えて言え



▲「これでいい？」
自分の名前の書かれた出席カードを探す子ども

ば、山の様子を地図で学ぶのに合わせて、実際に山を歩くことによっても学んでみると言えるだろうか。どちらも大切には違いない。山を歩くのは身体が疲れる、しかも全ての山に登るわけにはいかない。しかし、汗して登った山には特別な思いが残る。その思い出の中に、身体知と言ったものが含まれているであろう。

「自分の過去の経験から自由になる」等と軽々しく書いたが、私には日本で約二十年に渡って幼稚園の教師をしたという過去の経験がある。これは消す事の出来ない事実である。私は、「私——日本人の幼稚園教師」として、イギリスの日常の保育に参加する中から何を感じ、何を得るのか、又、どのように受け入れられ、どのように批判されるのか、先生や子ども達とどんな人間関係を創れるのか、さらに、自分のどのような片寄り（バイアス）に気付けるのか、それは日本人としての共通性を持った特性なの

か、それとも私自身の問題なのか……。これは自分自身を使った一つの実験と言えない事もないだろう。

少し幼稚園の背景について説明したい。この幼稚園はサリー州（強いて言えば日本の県に当たる行政単位）に五園ある公立幼稚園の内の一つで、一九四五年に創立されている。保育料は無料である。人口約一〇四万人のサリー州に公立幼稚園が五園という数字からだけでも、幼児教育の実情が日本とは大きく異なっていることが想像できるであろう。因みに日本には国公立合わせて六二一七園の幼稚園があり（一九九五年）人口で割ると、約二万人に一園の割合となる。当然、入園希望者は多く、生後しばらくから予約が受け付けられるが、この幼稚園の入園希望者リストには三〇〇人以上の名前が並んでいるという（イギリスの幼児教育の社会的な問題については、何かの機会に触れたいと思う）。

日本の幼稚園と基本的に異なる点をいくつか上げておこう。第一に園児の年齢である。イギリスの義務教育は五歳から始まるために、幼稚園には五歳児は存在しない。しかも、小学校にレセプションクラスというクラスを作り、四歳児からそこに受け入れようとする動きが広がっているために、この幼稚園でも九月に三歳になった三歳児が中心となり、四歳児は四分の一位の割合になる。学年の途中でレセプションクラスに移ってしまう子どもも多く、その度にウェイトィングリストから順次入園させるので子どもの出入りが非常に頻繁となる。

一日の保育時間もまた複雑である。(1)九時に来て、昼の給食を食べて二時半に降園するフルタイムの子ども (2)九時に来て、給食を食べて十二時十五分過ぎに降園する子ども (3)九時に来て、給食前の十一時半に降園する子ども (4)午後一時に来て、三時半まで過ごす午後のセッションの子ども、と四つ



▲先生が出席を取っている間に、朝のフルーツを配る子ども

のコースが混在する。こんな状態なので、クラスの人数も日本のように簡単には説明できないが、大体二十四人位の子どもが、入れ替わりしつつクラスにいて、その内十八人が給食を食べるといったところであろうか。

この幼稚園のクラス数は三クラスで、各クラスを基本的に二人の教師で担任する。この他に、特に援助の必要な子どもがいる場合にはパートタイムの先生が専門につく。私が入ったブルークラスには、行動の乱暴な男児、言葉の遅れのある男児、それぞれのために二人の先生が援助についていた。日本から見ると羨ましい教師の数である（単純に、大人の数が多ければ良いというものではないが）。

さて、九時も大分過ぎ、子どもたちも揃ってききた。子どもたちは保育室の一角にあるカーペットに丸く座って後から登園する子どもを待っている。大

体人数が揃った頃、先生は朝の出欠を取る。名前を呼ばれた子どもたちは「イエス、ミセス○○！」と、先生の名字を呼ぶ事を求められる。少し私語があるとシートと先生に注意されてしまう。私の基準からみると十分に静かなのだが……。子どもは「そこにおいても、いないかのように静かにしているのがよい」というビクトリア朝の価値観がまだ生きているのだろうか。この先生たちが、日本のかつての私のクラスの「賑やかさ」を見たらなんと思うであろうか、フツと不安がよぎる。イギリスの先生の「当たり前」的な価値観、こんな点についても考えてみたい。

さあ、一日の始まり！。気持ちを引き締めて一日を過ごそう。二十五年ぶりの教育実習の始まりである。

（ローハンプトンインスティテュート ロンドン

客員研究員）

子どものいる暮らし―男・夫・父

子どもを育てることと

研究することの間

無藤 隆

家族との生活と研究との結びつき

子どもを研究の対象としているとはいえ、私は別に自分の子どもを研究のデータとしたことはない。そんな面倒なことは出来ないと思う。研究の目で見ると、そのような真似はそうしょっちゅう子どもと一緒に

ないのに、もったいないとも感じる。逆に、研究の目になると、多分冷静になりすぎるし、距離を取りすぎるようにも思う。これは冷たく共感できないという意味ではない。研究においてはそうなる必要があるが、そうではなく、むしろ極めて丁寧に根気よく関わる場合もあるからだ。だが、研究であり、専

門の仕事である限り、どこかで冷静になり、第三者的に見つめる自分を感じるのである。もしそうでないという人がいたら、たとえ保育者であっても、専門性を喪失するのではないかと思う。

とはいえ、自分の家族と接することが研究と無縁だとも言えない。そこで普段から感じていることがどこかで研究上の問題意識になり、ヒントになるからである。むしろ私はそういう意味では研究と生活とを密接に関連づけているし、関連づけているのではないと、研究の意欲も発想も湧かない。無論、研究である以上、文献を読んでの考察や、観察や調査による資料の検討から来るアイデアが中心であるにしてもである。

生きることと家族

だが、多分、家族と一緒にいるということは、研究として実現できていることより遙かに大きなことを私に投げかけてくるように感じている。結局、人

生を生きるとは、大きなようだが、私の場合、家族とともに生きることなのであるし、そういった家族生活での想いを抜きに自分の人生を想像できない。そして、その家族の中で子どもの持つ比重は極めて大きい。その成長の喜びも苦労も含めてである。

私はいわゆる中年の時期のこの十年ほど、自分の研究の方向転換を図って、随分面白いことに出会いつつ進めてきたが、無論、数多くのしんどい思いもしてきた。多くの無理解と批判にも会うし、これだよいかという自己懷疑や、どう進んでよいかと戸惑い迷うことも数限りなくある。同時に、自分の家



族をめぐっての生活でも、親兄弟・親族までも含めれば、世間で言う「生病死老死」のほとんどの問題に出会い、巻き込まれてござるを得なかった。それが中期なのかと思いましたが、その度に、救いは、仕事にもあるが、それ以上に家族にあった。生涯発達と、私も講義やテキストには気楽に書き話すが、やはりその実態は重いものがある。

家事に関わること

もう何年になるだろうか。それまで父親と母親の双方が夜や日曜日などに仕事で出ているときに、その頃同居していた祖母に子どもの面倒をみてもらっていた。その祖母が一度倒れて再び元気を取り戻して、それでもだいたい弱ってきてはいたが、多少は子どもの面倒をみてもらっていた。それがついにあるときに倒れ、そのまま亡くなってしまったのである。

その悲しみもさることながら、夫婦ともに働いて

いる身としては、早速仕事が夜たまたま入っているとか、学会などで出張するときに、もう一方に夜の会議や研究会が入ると、どうしようもなくなってしまふ。子どもの方も下の子どもは小学校低学年だったが、夕食まで一人でいることで既に気持ちが悪定になっていく。

私もそれまで多少は家事を手伝ってはいたものの、一人で何かをするという経験は滅多になく、途方にくれることも多かった。といっても、ともあれ、家庭生活は毎日のことなのだから、ひとまず考えてとか、練習してなどと悠長なことは言っていない。

それ以上に、夜両親がともに揃って留守をするところがないようにするという大方針をまず立てた。すると、まず困るのが私の数多く参加したり主催していた研究会やゼミの類である。昼間出来るものはずべて昼間にやることにして、またやらないで済む研究会や勉強会はいっさい辞めることにした。さばれ

る会合はなるべくさぼるとか、学会などもなるべく泊まりは避けるなどするようにする。最小限、ぎりぎりどうしてもやらなければ困るとか、職務や仕事の性質上夜に掛かるものに限定して遅くなることにするとといったことを考えたのである。その時には、諸方面にだいぶ迷惑をかけたし、今でも掛けている。事情を分かかって助けてもらった人には今でも感謝あるのみである。

実際、最近では、夫婦で時間を調整して、（私の方がずっと少ないにせよ）私が夜家にいる日を週に少しはともかく前もって設定しておくようにして、その夜にぶつかる会合は原則として出ないことにしている。もっとも、入試等の業務はそうはいかないのでいつも困る。また、学校現場などに行くと、飲み会等も重要なコミュニケーションの場だから、出た方がよい気もする。編集会議の類は互いに時間のあるときは大概は夜になる。

ともあれ、だいぶ家事の技術は向上したようである。

一通り何でもこなせるようになってきている。食事を作ることや掃除も洗濯もである。夫婦が揃っているときには今でも私の方がすぐ手を抜くという実情はあまり変わっていないように思うが、私が一人であれば、やらざるを得ない。子どもが大きくなるに連れて、随分手伝ってくれるようになってきた。

特に、時期によってまた家族の健康の状態によっては、私の方が主夫のように家事の中心になることさえある。もっともすぐに仕事が忙しくなって、世間の平均的な男性よりも家にいないときも多いのだが。

家事をたくさんやるようになってくると、随分感覚も変わってくることに驚く。朝起きて、よく晴れていると、洗濯日和だと思ったり、今日は「生ゴミ」の日だと慌てたりすることも珍しくないが、主婦的かもしれない。



い。一年の内比較的家にいられる時期もあるが、そういった折に家で仕事をしていると、家事の合間に仕事をするようなときもあり、仕事が細切れになっ
ていらだったり、逆に気分転換を楽しんだりする。

私は多分十二時間程度は普段は仕事をしているのだ
ろうと思うし、それも苦にならないどころか楽しんで
いるかも知れないと思う。まして、原稿を書くの
であれば、いくらでもワープロに向かってる。そ
ういう人間が家事に時間を取られるのは、始めの内
は随分と苦痛であった。今でも忙しいときには楽で
はないが、少なくともそれに時間を取られての焦り
はあまり感じないで済むようになった。どこかで家
事に時間を費やすのが人間として正当なことだとい
う感じが理屈ではなく出てきたようだし、仕事の計
画を立てるときにも多少は家事のことを考慮するよ
うになった。私は放っておかれれば日曜でも仕事を
しているから、それは相当に大きな変化なのである
(もっとも、仕事に追われているときに家事を嫌

がって家族と衝突することは今でも絶えないが)。

子どもと付き合うこと

家事もさることながら、家庭では家族とともに時
間を過ごしている。子どもが大きくなってくると、
あまり一緒に出かけるといふことも多くはないが、
まだ小学生なので、遠くに出かけるときは親と一緒
でないといけない。映画を見に行ったり(「もの
け姫」も連れて行った)、博物館に行ったり、先日
は酒の市にも連れて行ったりした。まだ、親と一緒
でもどこかに行きたい年齢らしい。だが、普段の散
歩程度になると、幼児の頃とは違って、なかなかつ
いてはこない。家でテレビゲームをしたりマンガを
読んだりしている方がよいらしい。友だちが遊びに
来るとなれば、親と付き合うよりそちらを優先す
る。

多分、私は普通の男性よりは子ども好きだろう。
特に乳幼児は見えていて本当に楽しい。では、自分の

子どもと付き合うのは同じように楽しいのかと言え
ば、だいぶ違うようだ。やはり成長に責任を感じる
からだろうか。心配したり、これでよいのかと文句
を付けたり、意図的にしつづけたりもする。子どもが
妙に大人びたことを言えば、親馬鹿らしく感心した
りもする。確かに、小さい頃から毎日のように知っ
ているだけでも、研究としてたまに見ている相手と
は違う。自分に似たところがあるだけに可愛いよう
なときに憎たらしいような気もする。

子どもを持つ親なら、誰でもそうかどうか。小さ
い頃に体が弱かったのによく育ったという感慨と
か、保育園や小学校低学年の頃、適応するのに苦労
したとか、友だちとのトラブルがあったといった思
い出も思い浮かぶ。これから偉くならなくてもよい
から無事に育ってほしいものだと思ふ。でも、実際
には少しでも世間並にと思つて、無理を子どもに言
うのかも知れない。

ちよつとした日々のやり取りや振る舞いに、子ど

もの性格の特徴も出てきて、それがその子らしくて
よいなと思えるときもあるが、これではこれから世
の中を渡っていくときに困るだろうと思わざるを得
ないときもある。そんな折に無駄かも知れない心配
をするし、多少は矯正しようと気を使って、応対す
るようにもする。

どこにでもある親の気持ちに過ぎない。そんな
日々を過ごすことが、どう研究と関わるかという始
めの問題に戻れば、もはや既にそういう間は意味が
ないような気がする。生きるという生活と人生自体
に研究の間が降りてくれば、どう日々を過ごそう
と、「子どものいる暮らし」を見つめることに結び
つくしかないと思うからである。

(お茶の水女子大学)



門の内に入って来られない子ども

—— 内と外の間を揺れ動く心 ——

津守 真

幼い子どもがはじめての場所にすぐに入っていられないのは、だれでものことである。そのときに大人があせると、注意深く傍らにいれば分かるはずの繊細な子どもの気持ちを察することができなくなる。だれかが子どもの動きにセンシティブになって過ごすと、子どもはその人を媒介にして内と外の世界を関連づける。そういう子どもの保育をして数年を経ると、最初門から入って来られなかったときの子どもたちの心の動きが分かってくる。私はひとりの繊細な子どもMくんのことからこのことを考えてみ



たいと思う。個人差のあることだが、だれにもある程度共通であろう。

内と外のテーマ

最初の日、Mくんは門から入ろうとせず、泣いて母にくっつき、外に出たがった。私が近寄ると私を手で押しのかけた。

そのときには私は気づかなかったが、Mくんの心には、すでに内と外のテーマがあったのだと思う。子どもは見知らぬ外の世界に出てゆくには勇氣がいるし、保育者の助けを必要としている。保育の経過を経て後に分かったことだが、子どもが外の世界に出てゆくまでには、内と外との間を何度も揺れ動き、外から襲し寄せて来る外界を恐れつつ立ち向かい、受け身にとどまらずに能動に変えてゆく体験をせねばならない。まだ出発点に立っているときの子どもの繊細な心を察しないで、ずけずけと心の内に踏み込んではいならない。

この一瞬

母親と一緒にやく保育室に入ってきたMくんは、高いところの上っている子どもを見ていた。母親に手伝って高いところにあげてもらった。そのときまたまた私と目が合ってにっこり笑った。数日後、母親と私とMくんとは滑り台の上に行った。ひ



とりの子どもが私を押し、子期せずに私は滑った。Mくんが私の背中につかまって滑って来た。私は滑り降りたMくんと一瞬目が合って互いに笑った。落下の感覚を共有した驚きと喜びがあった。その感覚を味わいつつ、滑り台の下でしばらくじっとしているMくんは立ち上がり、また階段を上って滑る。私は何もしなくともよい。子どもと現在を共有しそこに生ずる小さな自発性を動くままにしていればよかった。気がついたら一時間たっていた。たいしたことをしたわけではないのだが、Mくんと一緒に滑り降りて目が合った、この一瞬が子どもを力づけたのだと思う。

この後もMくんは、滑り台を滑り降りることを好んだ。Mくんには高いところから重力で下に落ちることが特別に快いようだ。いつも滑り台で私と目を合わせて、ニコッと静かに笑ってから滑る。

取られる前に放り投げる

Mくんにはもうひとつ顕著なことがある。他の子がMくんの自動車を取ろうとする時、取られる前に自動車を床に放り投げる。取られるくらいならその前に自分から手放したほうがまだという精神である。これは大人同士の間でもときどき経験することである。他人から自分が批判される前に自分の仕事や部署を手放す場合がある。第三者から見ると随分性急だったり、あるいは攻撃的に見えることもある。しかし、そ



の人は外から来るものを恐れているのである。だれにもあることだが、人によってはこのような外と内との関係に特別に繊細である。

こうして随分慣れてからも、Mくんは、朝、門から入るのをいやがることしばしばあった。F先生が考案して、籠に入れて引張るとすぐに入ってくる。Mくんは、静かに手をちよっと上げて出発の合図をする。F先生の保育はこの子どもと外のテーマにマッチしていることに私は感心した。子どもが手を上げて出発の合図をするのを待って大人が引張るのも、子ども自身の選択をたいせつにする仕方である。

電車を目の前にかざして動かす

Mくんは電車を目の前にかざして動かすのが好きである。これを自閉症の特徴とする見方があるが、私はその考えはとらない。私が別の電車を同じようにやっている、Mくんはすぐに興味をもち、手を出して私の電車を取った。そのうちに、Mくんは私の膝に座り、私によりかかって電車を動かした。随分長くやったので足が痛くなったが、Mくんと同じ方向を向いていたので、私はMくんの繊細な心の動きが分かった。Mくんは電車を動かしていたのではないかもしれない。電車窓の間から見える格子縞の透き間を通して向こう側の景色が動くのを楽しんでいたのかもしれない。



こうして日がたつうちに、Mくんは次第にひとり電車や玩具をいじりはじめた。あるとき、Mくんが電車を動かしているわきで、私はレールの斜面に、連結した電車を置いて、それが滑りおろるのを繰り返していた。Mくんはその電車を取って斜面に置いた。うまくレールに乗らないが、何度も試みた。また鉄橋の柵をレールの溝に沿って直立に立てた。レールと、鉄橋の柵と斜面とが組合わさった立体ができる。つまりそこにひとつの構築物（結合のイメージ）ができた。踏切を上げたり下げたりして遊ぶ。Mくんの能動性は、結合と直立に向かっている。コーナーに段ポールを見つけて、それを私に垂直に立てさせた。私が段ポールの家の中にはいると、Mくんも入って来て窓から外を見る。外に出たり、また中に入る。これまでMくんの結合と直立の構築物は、指先の小さな空間で行われていたが、いまや全身を動かす段ポールになった。しかしまだそれは母とMくんと私とで作った空間においてである。それ以外の人が入るとだめになってしまう。

内と外の間を揺れ動く心

約一年が経った。

ある日、朝のうち、Mくんはトランポリンを自分でとんだ。そのとき、鉄棒に頭をぶつけ泣いて母に抱かれた。予期しない災難に受動的に曝された。こんな小さなこと



でもMくんにとっては大きい。トランポリンの上昇運動は、一挙に崩壊し活動は継続できなくなる。母に抱かれ、母親の髪を引っ張る。そうすると気が済んで自分で歩いて外にゆく。いまこの子どもは受動を能動に変えることを試みつつある。

ある日、Mくんはミニハウスにミニカーを入れたり出したりして遊んでいた。私は、内と外の間を揺れ動く心の表現と思った。二台のうち、一台は青で、一台は黒である。Mくんは青を動かしているので、私は黒を動かし、ときどきガレージに戻ったり、外を遠くまで回ってからガレージに戻った。駐車場と言って中に入れ、積み木を並べて自動車道路を作った。こうして四十〜五十分、昼食までよくあきないと思うくらい繰り返した。

数日後、Mくんは実習生と門の外側で子供用自動車に乗り、門の中に入ったり出たりして遊んだ。ミニハウスで車庫入れをして遊んだのを現実に行っているように思えた。Mくんは内と外のテーマを現実の場に移した。

Mくんはガレージに自動車が入っているマンシヨンの広告を塗りつぶした。毎日のようにいくつも塗りつぶした。内と外のテーマに強い関心があることが分かる。

Mくんは庭で砂をやっていた。それからマンホールの蓋の格子に石を乗せて、石がマンホールの暗い水の中に落ちそうになると、「あぶないあぶない」と言った。落下には彼の危機感が伴っていることが分かる。長い時間そうして遊び、帰りに弁当をば



くばくと短時間に全部食べた。

午後、子供用自動車に乗って、わざと溝に落ちそうにした。それを何度もやった。

二年目の末のことである。Mくんは以前にやっていたように電車を目の前で動かしていた。私がそばにいたが、双方ともどうしてよいか分からず戸惑った。Mくんはもはやずっと先を歩んでいるのに、以前の状態を見られてしまったという戸惑いのように私は感じた。若い実習生が来ると喜んで飛んでいった。午後になって、箱積み木の間を渡したはしごを自分でわたり、渡り終えたとき「セイコウ」と言った。はしごの透き間から私と目を合わせて笑い合った。私はMくんとの初期の関係を卒業したのを感じた。

こうしてMくんの一連の保育を経過してみると、最初の日に門から入ろうとせず、私を押しつけた子どもの中には内と外のテーマがあったことが分かる。

保育者は、子どもが新しい環境に入っていない、母親から離れないと言う前に、子どもの動きに敏感になって、それに答える。そのとき子どもは自分の心にあるテーマを展開させる。

心の動くままに遊ぶようになるまで

—— A との長い道のり ——

伊集院 理子

Aは、四月に四歳児クラスに入園してきた、男児である。入園の次の日から、朝はごく普通に登園してきて、親離れもスムーズにでき、園生活に移行するのだが、緊張した表情のまま、友だちが電車遊びをしているそばに座りこんで、じっとその様子を見ていたり、その場から保育室で遊んでいるまわりの子どもの様子を見ていることが多かった。時間が経過するに従って、不安が募ってくるのか、目にうっすら涙を浮

かべ目のまわりをほのかに赤くしているのに、泣きたい不安な気持を表立って表出することが出来ずに、必死に押さえこんでいる様子であった。そんなAを見ると、「Aちゃん、大丈夫？」と声をかけずにはいられなくなつて、声をかけると、無理をして目を細めて笑って見せるのだった。泣きたいならば思いっきり泣いてしまえばいいのに、そう出来ないAの不自由さを、その時私は強く感じた。

だんだん日が経つにつれて、三歳児から進級してき

た子どもたちがやりたいことを見つけ活発に遊ぶ様子に刺激を受けて、他の新入園児も自分たちで遊びを見つけ動き出していった。その中で、Aは自分からはやりたいことが見つけられず、大半の時間を担任のまわりをウロウロしながら過ごしていた。「もう、お友だちが○人来ました」「まだ、○ちゃんが来ていません」といったようなことを、担任に話しかけてきた。

みんなが揃ったとか、登園した順番とか、外枠的なことがまず気になってしまう様子であった。又、自分の好きなスポーツについての話もよくしてきたが、自身の身体を動かしてやったスポーツの話ではなく、プロサッカー、プロ野球を観戦しての話であった。

担任のまわりにつかず離れずいて、このように言語的に働きかけてはくるものの、何ら自分からは自分の身体を動かして行動を起こそうとはしないのである。

そんなAを見てみると、思考の世界と行動の世界のなはだしいギャップがAの不自由さをもたらしている

ように思えた。

*

二学期になって、約一ヶ月がたち、今現在もAは、まだまだ心の動きのままに身体を動かすことができな
いでいる。A自身が心を動かして、その心の動きのままに自分の身体を動かして行動を起こしていくことを積み重ねることで、自分自身の力で自分の不自由さが少しでも解放していけるように、まだまだ先が長い道のりだが、担任としては、先をあせらずに直実に支えていきたいと思っている所である。

この機会に、四月からのAの行動を思いかえし、これまでのAの変遷を見つめなおしてみたいと思っている。

迷子のカメラ捜し

四月の終わりに、クラスで飼っていたカメラを園庭で散歩させていた時に、子どもがふと目を離したすき

に、カメが行方不明になってしまった。私は、保育室にいて、担任してまだ間もない子どもたち一人ひとりへの対応に追われていた。子どもたちからカメがいなくなったことを知らされて分かってはいたが、すぐには保育室から離れられずにいた。

Aは、そんな私に、「早くカメを捜しに行かなくては」と盛んに働きかけてきた。Aに何度も催促され、保育室のことが気になりながら、Aや他の子どもたちと園庭に出て、一通り見失った場所の周辺を捜してみた。カメがいなくなったと聞かされた時点で、担任して間もない幼い子どもたちにカメの見張りをまかせたままにした自分の配慮のなさを嘆きつつも、カメの隠れこんでしまう場所はいくらでもある広い園庭なので、私は半ばあきらめていた。その場で必死にカメを捜すことより、保育室に戻って、他の事の対応に心をさきたいという気持ちが強かった。そこで、一通り捜して、又保育室に戻ってしまった。

Aは、カメの行方がとても気になった様子で、お帰

り前にも、「カメをもう一度捜しに行かなくては」と誘うので、「Aちゃん、先生のかわりにもう一度捜しに行ってきたくれる？」と頼むと、Aは一人で園庭にかけつけていった。一通り園庭を見回ってくれたのか、戻ってきて、「見てきましたけど、いませんでした」と報告してくれた。

次の日も、その次の日も、「カメを捜しに行きます」と言って、Aは自分から園庭に出かけていくようになった。

「何かをしにい」という名目が立たないと動きにくかったAに、「カメを捜しにい」という名目ができただことで、Aは、自分一人でお庭に出ていけるようになっていった。

お化け屋敷のキップ係

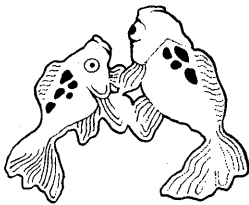
五月の半ばを過ぎた頃、保育室では、衝立や開くと「く」の字型にコーナーを区切ることが出来るままごと用の柵を使って、空間を四角く区切って、その上に

大きな黒い布をかけて、暗い空間を作って、その中でお化け屋敷ごっこが展開していた。狭い空間に数人で入りこみ、まわりのお化け屋敷やの子どもは、衝立をガタガタさせたり、「おばけ〜」と恐しそうな声色で言うといった、たわいもない遊びであったが、暗い閉空間にごちゃごちゃになって入る楽しさがあって、結構盛りあがっていた。

Aは、その様子を遠目に見ているながら、そこには近づくことが出来ないでいた。そこで、「Aちゃん、お化け屋敷のキップやさんになってくれるかなあ」と声をかけると、まんざらでもなさそうだった。紙を取ってきて、「これをキップみたいに切って、みんなに配ってみたら」と言うと、「うん」と言っていて、やりだした。こちらは、同じぐらいの大きさに小さく紙を切るというイメージだったが、Aが切ったものは、大小バラバラ、切り方は、まっすぐではなく、ヘビのように蛇行していたり、引きちぎったようになっていた。Aのはさみの使い方は、驚くほど幼く、これまでの経

験の少なさを物語っていた。切った紙に何か文字や印などを書きこむといった発想もなく、ただ白い、見ためにはとてもキップとは思えないキップが出来あがった。

Aの作ったものを、小さいカゴの中に入れて、「キップができたね」とAに話し、他の子どもたちには、「Aちゃんがお化け屋敷のキップを作ってくれたから、Aちゃんからキップをもらってから、お化け屋敷に入ってください」と声をかけ、お化け屋敷のとなりにキップ売り場をつくった。キップ売り場に座ったAから、子どもたちはキップを受けとり、それからお化け屋敷に入るようになっていった。お化け屋敷やさんをやっていた子どもの中には、「僕もキップをつくりだした子どももいた



が、Aを排除するような動きはなく、Aのへなへなのキップに対しても誰一人文句を言ったりする子もいなかった。

担任としては、クラスの子どもたちの柔らかさを有難く思うとともに、Aがこういう形で他の子どもたちと一緒に活動に加わられたことをとてもうれしく思った。

次の日も、お化け屋敷が始まると、「キップの紙は？」と言って、自分からキップ系の役を買って出てくれた。

実習生との共依存関係

五月後半から六月に入ると、物静かで温和な感じのAに魅かれる女兒が数名出てきて、その女兒たちからの積極的なアプローチもあり、担任のまわりで過ごす時間が減ってきていた。女兒たちと一緒にいるわけではないが、Aなりにだいたい自然に幼稚園で過ごせ

るようになってきていた。

そんな様子で、六月に入って数日が過ぎた頃、実習生が二人、二週間、クラスの中に入るようになった。

一人の実習生は行動が緩慢で、表情も堅く、子どもが親しみを感じてすっと近づいていきにくいタイプで、子どもたちと関わるきっかけがなかなかつかめずにいた。そんな実習生にとっては、動きが少なく、一人で手持ち無沙汰に過ごしている時が多いAは、働きかけやすい存在であったようで、その実習生がAと関わるが多くなっていった。Aにとっても、寄り添ってくれる大人がいれば、その大人と過ごす方が、友だちの中で過ごすより楽に過ごせるわけで、Aもその実習生と過ごすことを選んだ。かくして、Aとその実習生との共依存関係が生まれていった。

実習生が入って、又、大人と過ごす時間が増えてしまったAを見て、日常の担任一人と子ども三十四人という保育状況の中で、大人に寄り添ってほしいと思っているAの思いに充分応じきれないという事実を

思い知らされたという思いと、Aが子どもたちの中で自分なりの存り方を確立していけそうになっていたのに、又逆戻りさせてしまっているのではないかという思いと、複雑な心境で、Aとその実習生との共依存関係を見守っていた。

箱の中に箱を詰めこむ

保育室には、自由に使える空箱が常備してあって、子どもたちは空箱を使って色々なものを作っていた。実習期間に入った頃、それまでよりも、空箱製作をする子どもたちが増えていて、Aも実習生の誘いもあったのだらうか、空箱にむかっている時間が増えていた。Aは、少し大きめの箱の中に、それよりも小さい箱を詰め、又、さらに小さい箱を詰め、その又中に、箱を切った紙きれや、紙を小さく切ったものなどを詰めこんでいた。そして、その箱を紙の手さげ袋の中に入れて、それを持ち歩いていた。箱や紙の切り方は、相変わらず幼く、はさみで切っているのか、ちぎって

いるのか、よくわからないといった様子であった。

箱の中に箱や紙を詰めこんでいるAを見て、その行為は、Aの心の中を象徴しているように思えた。Aは、今、自分の中に色々なものを詰めこんで、自分を固めているのかもしれない、とふと思った。詰め込む行為自体に意味があると思っていながらも、イメージを持って箱や紙をつけたり描いたりしながら製作している他の子どもたちへの働きかけのレベルで、あさほかにも「何、作っているのかな？」などと働きかけたくなってしまう、口をついて出ってしまったその言葉を慌てて飲みこんだ。そして、先を急いではいけない、AはAなりに箱を箱の中に入れて、自分の中にあるものを表出しながら物をつくりだしているのではないかと、と自分自身を戒めた。

実習期間後のA

頼っていた大人がいなくなり、又、担任のまわりをウロウロする状態に戻ってしまうかもしれないと半ば

思いながら、きっとAは実習生が来る前の状態よりもさらに進んで、自分で動きだすのではないかと半ば確信していた。私の期待どおり、Aは何かを吹っ切ったように思えた。

四月から毎週一回、大学院の砂上さんが、私のクラスに入って、保育観察記録を取ってくれている。

実習後すぐの砂上さんの記録の中に、朝から箱の置いてあるコーナーで箱を捜しながら他の子と明るく会話しているAの姿が書きとめられている。又、園庭に一人で出ていき、園庭の真ん中でホームランを打つような動きをしてポーズをとったり、一人で園庭を走りまわっている様子も記録されている。Aは外に出ることを、自分で選択して、行動しているのである。外から見れば、同じように園庭をブラブラしているように見えても、自分で選びとって、自分なりの園庭での居方をつくりだしているという点で、名目がなければ外に出られなかった一学期の初めの頃とは、大いに違ってきている。

その後の記録の中に、担任の姿が見えなくて少し不安になっている場面もある。記録者が心配して担任を捜して、担任の居場所をAに伝えるが、Aは「もう少しここにいる」と記録者に伝えている。担任に頼るのではなく、自分の力で乗りこえることを選びとっているAがそこにいる。

二学期になってからのA

二学期になってから一ヶ月がたち、Aは毎日早めに元気に登園してきている。

うちの幼稚園の庭には起伏があり、子どもたちが通称「おやま」と呼んでいる高台は、長い夏休みを経て、雑草園と化し、虫の宝庫となっている。多くの子どもたちは、「おやま」での虫とりで夢中になった。Aも友だちや担任とよく「おやま」に出かけていった。Aは、自分自身の虫を捜すというよりは、あくまでも友だちの手伝いに徹している様子であった。そんなAを見て、活動の主人公、中心の位置に自分を持つ

ていくことに、まだまだ抵抗を感じるAがいることを改めて感じた。とはいっても、主人公ではなくとも、脇役であっても、友だちとの遊びに自分から関わっていいという姿がグリーンと増えてきている。

ある日のお片づけの時、Aは自分のクラスには見かけない本を見つけ、自分で本の裏を見て、「これは○の組の本です」と担任に伝えてきた。一学期のAだったら、そこまでAの動きはおしまいであったと思うが、Aは少ししてから、「届けてきます」と言って、その本を別のクラスまで届けにいった。たったそれだけのことであったが、Aの思考の世界と行動の世界のギャップが縮まってきていることが伝わってきて、とてもうれしく思った。

*

Aのこれまでの軌跡を断片的に振り返ってみてきて、目立たないが、Aは直実に変わってきている。

観察記録をとってくれている砂上さんが、はじめの観察を終えての感想の中に、次のような文章を書いている。

——(略) 自由保育の幼稚園に対して「子どもを遊ばせているだけだ」というような批判がありますが、「本当に自分のやりたい遊びを見つけて遊ぶ」ことは、水が高いところから低いところへ流れるような楽なものでは決してなく、何かを自分の中に構築していくことのように思います。そのためには、遊ばないでいること(迷っていること)も含めて、遊びのための十分な時間と空間が保証されていることがとても重要



だと感じました——

はじめての観察の後にここまで言い当ててしまう彼女の鋭さに感心するとともに、三年前に卒園させた男児Kの母親の言葉を思いだした。三番目の子どもをうちの園で育てたその母親は、上の二人の子どもの時と比較しながら、卒園を目の前にした保護者会の折にこう話してくれた。

——上の二人にくらべ、幼稚園に通う道すがら、Kが一番孤独だったように思います。その日一日誰と遊ぶか、何をして遊ぶかは、全てKにまかされており、Kが決めるべきことだったからです。ここの保育は、自由でいいという面もありますが、そういうった厳しさも含まれていたと思います。そういう中で過ごせたこと、Kにとっては大変であったと思いますが、とてもよかったと思います。親としても、三人の子どもの幼稚園生活の中で、この三年間が一番学ばせてもらいました——

砂上さんも、Kの母親も、自由に遊ぶことの厳し

さ、大変さに触れている。私たちは、あえて、厳しさ、大変さも含む自由の中で、子どもたち自身でやりたいことを見つけ、それを自分なりにふくらませていくことを子どもたちに求めているわけである。Aのように、やるべき活動を呈示してもらえたら、きっとその方がずっと楽で過ごしやすいのかもしれないと思われる子どもたちもたくさんいる。子どもにとっても厳しさ、大変さを含む自由ということを肝に銘じて、先を急いで引っぱりすぎないように気をつけて、Aを支え導きながら、Aが心が動くままに行動を起こし遊べるようになるまで、Aとの道のりをゆっくりと歩んでいこうと思っている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

ハロウィーンと運動会

今井 七重

一年の中で一番過ごしやすいといわれる十月、十一月に入ると、それまでのうだるような暑さは一体どこかの話だったのだろうかと思うほど、連日秋晴れでさわやかな天気が続きます。東京で、木枯らし一号が吹いたというニュースを聞く時期でさえ、亜熱帯地方の香港では、あいかわらず、半袖で過ごせます。しか

し、お店のディスプレイは、すっかり秋・冬の装いで、購買意欲をかきたてます。街中では、早くも半袖から長袖に装いを変えている人もいますが、それはほとんど現地の人か、長年住み慣れた日本人に限られています。冬といっても雪が降るわけではないので、ウールのセーターで充分かと思われる程度ですが、不

思議なもので、現地の人がそれなりにコートを着たり、手袋にブーツといういでたちでいると、「郷に依りては郷に従え」ではありませんが、同じような気分になるそうです。今年初めての冬を経験する私たちは、たぶん東京の経験から薄着になると思われるかもしれませんが、来年は、しっかりコートを着ているかもしれません。

十月に入ると、ハロウィーン関連のものが街のあちこちで売られます。娘たちの学校でも、図工の時間にハロウィーン用のマスクやお菓子をを入れるための袋を作ったり、ハロウィーン当日は、休み時間に「Trick or Treat」と言いながら、好きな教室を訪れ、仮装した先生から、お菓子をもらったりしました。住んでいるアパート主催のハロウィーンパーティのお誘いがあったり、同じスクールバスを利用している人たちとの企画もありました。日本にいと、なかなかできないだけに、本格的にハロウィーンを楽しもうと誰もが

積極的でした。

同じスクールバス利用者で主催したものは、事前にお母さんたちが、出席者の確認、訪問する家の選定、その順番、途中の安全確認、付き添いの有無など色々プランを練りました。最終的に三十名近くが参加し、三グループに分けました。それぞれが思い思いのコスチュームに身をつつみ（手作りもちろん可能ですが、ハロウィーン用の衣裳は街中に安価であふれており、これを利用する人が多いです）、お菓子をを入れる袋と、お母さんたちが用意した手作りカード（訪れる家の場所・注意事項・地図・同じグループに属する人の名前が書いてあります）を首からさげて、グループ毎に出発しました。カードの指示に従い、訪れた家では、仮装した家主から工夫を凝らしたお菓子をいただき、カードにサインをしてもらいました。途中の横断歩道では、安全上から、お母さんが数名立ちました。

香港では、横断歩道といっても、信号機が無いところが多く、仮にあっても守っている人はほとんどいません。信号が赤、つまり渡ってはいけないといっている、平気で渡ります。もちろん、渡ってよしの青でも渡りますから、信号はあってもあまり意味をなさなといえます。周りの流れでつい進んでいて、赤だったということがかなりありますから、しつかり自分で見ていないと危険です。

信号一つをとっても日本と違う事がありますから、細心の注意が必要で、訪れる家もすべて知りあいの家に限られます。下準備から、当日のお世話と大変ではありませんが、子どもたちのために異国の地でも一生懸命なお母さんたちの姿は、素敵でした。子どもにも、お菓子がもらえてうれしい、好きな衣裳を着られてうれしい、以上になにか心にかるものがあると思います。

もう一つの秋のビッグイベントといえば、運動会です。

香港日本人学校（娘たちの通う香港日本人学校大埔校の姉妹校）は、各学年六、七クラス、それだけでなく、毎年公共の運動場を借りて行っています。とにかく、人数が多すぎて、自分の子どもをカメラに収めるのは、至難の技。そこで、苦肉の策として事前に、学校から「○○さんは、障害物競争では、何番目に走ります、等々」のお手紙をもらい、当日は、常に「現在○○年○組 ○番目が走っています。」との紙が掲示されるそうです。それがなければ、次々に走り続ける体操服姿の生徒の中から自分の子どもを見つける事は不可能というわけです。

一方、去年開校したばかりの香港日本人学校大埔校は、けっして広いとはいえない芝



の校庭ですが、総勢二七〇名のため、十一月二日こ
で運動会が開催されました。緑豊かな場所に学校があ
る反面、交通の便はあまりよくなく、当然学校の駐車
場の使用は禁止、近辺も駐車禁止、駐車場もないこと
から、保護者は、大型バスをチャーターし揃って早朝
から駆けつけました。生徒のスクールバス七台が到着
してまもなく、各方面からの計十台の大型バスが続々
と到着する様相は、壮観でした。

人数が少ないため、各学年平均六種目に参加しま
す。我が家は、一年と三年及び紅白に分かれていまし
たので、ほとんどどちらかが出場しているという状態
でした。普通の学習時に学年の枠を超えた縦割り活動
があるため、競技もその特色を生かしているものがか
なりありました。リレーは、縦割り班二学年ごとのメ
ンバーで行いました。背の高さで機械的に走る順番を
決めるのではなく、子どもたちで、誰が最初に走った
方がいいか、誰をアンカーにもってくるかを話し合っ

たようです。結果、男女混合も
ありますし、三年生の女の子と
四年生の男の子が一緒に走った
りもしました。なかでも圧巻
は、紅白にわかれた団体演技で



す。白組「スイミーものがたり」赤組「まほうの国タ
イポランド」と名づけられた演技を、一年生から六年
生までが一緒に演じました。同学年の生徒を一つにま
とめるのではなく、できることにながりの幅がある一
年から六年生をまとめるのですから、先生方の苦労も
並大抵ではなかったと思いますが、それぞれの学年が
その学年なりにできることを一生懸命やり、それが全
体として一つの形をなして、すばらしいものでし
た。通常行われる予行演習もなく、先生たちも紅白に
分かれ、演技指導していたため、当日が生徒にとって
も先生にとっても、相手チームの演技を初めて見る機
会だったというのは、とても興味深いです。生徒たち

は自分の出ていない競技でも真剣に見ていて、応援にも力が入っていたように思いますが、これは普段の縦割り活動で、身近に知っている上級生や下級生がいたのも一因かと思えます。

異国での運動会を改めて感じたのは、ラジオ体操の代わりに行われた「香港日本人学校体操」と日本の盆踊り的な「タイポ音頭」でした。中国音楽のゆるやかな調べにのって太極拳の動きをする「香港日本人学校体操」は、香港日本人学校の運動会では必ずとりいれられてきたという伝統の体操です。全校演技の「タイポ音頭」は、鐘の伴奏だけで、はっぴ姿のひとりの先生がカラオケ風にこぶしを聞かせ、みごとに音頭を歌い上げ、日本への郷愁を誘いました。又、香港では、火薬の使用が禁止されているため、耳をつんざくような「バーン」というピストル音ではなく、「電子スターター」というピストルに似たものを使つての静かなスタートルが珍しいといえます。これは、ピストルか

ら出たラインがスピーカーボックスにつながつていて、ピストルの引き金を引くと、「バーン」とも「シャーン」とも聞こえる電子音がスピーカーから出て、その瞬間にピストル部分もチカッと光るものです。説明を受けるまでは、何を合図に子どもたちは走っているのかちつとも分からず、不思議なスタートルだなあと思っていたのですが、お国柄でした。

日本らしさと香港らしさをミックスした思ひ出深い運動会も無事終了し、季節は、冬に向かいます。この先どんなことが待っているのでしょうか。期待で一杯です。

(元幼稚園児の母・香港在住)

夢の日々(四)

二人で入園し、

三人で卒園(三)



大多和 檀

再び、「夢の日々」だった神明幼稚園時代に戻ります。さて、ふみちゃん、せいちゃん
の二人は、年長の九月にさおりちゃんを迎え、三人となりました。

この「二」から「三」の変化は、これまでどんなに私が「三人目の子どもに」なろうと
がんばっても、本当の子どもにはかなわない、と痛感させられ、又、ふみちゃん、せい
ちゃんにとっては、友達同士のかかわり方に大きな大きな変化をもたらしたのです。

例えば、これまでは、せいちゃんがふみちゃんに話を持ちかけた時、「いいよ」となれば一緒にやり、「ヤダよ」と言われれば「じゃあせいじ一人でやるよ」となります（私は、その時々二人の気持ちに合わせて、一緒に遊んだり、どちらかに加わったり、時には、「保育者の目」から二人を解き放したりと様々でした）。

▼部屋の前で自

由に放たれて
いる動物たち
ウサギ三匹と
ニワトリを
飼っていまし
た。
ゲージの上の
箱にウサギが
います。





▼四人（私も含めて）てウサギとニワトリのお世話をしていました。

まん中のふみちゃんが抱いているのがウサギです。

が、三人になったことで、二対一、という関係が生じたのです。しかもこの二対一には、遊びや気が合ったということから三種類の組み合わせが生じてきます。

そして、三人で一つの事に取り組んでいる場合でも、二対一となって自分も「二」に加わりたいという思いが生じた場合でも、一人は「いいよ」と言いもう一人は「ダメ」と言



う、これまでの二人の生活にはなかった状況が出てきたのです。

ふみちゃん、せいちゃんの生活で欠けているのはこの状況でしたからこそ、私はなんとか「三人目の子ども」になろうとしていたのですが、さおりちゃんが加わったことで、

日々、いとも自然に、又突発的にこのような状況が生まれ、私も一つ力みが抜けました。

人間の生活は、「いい」か「ダメ」かとはっきり割り切れないことだらけです。常に「いい」と「ダメ」の両方が入りまじっていて、その中で、自分はどうかかわっていくのか考え、いい状況が生まれたり、それがダメな状況になったりの連続だと思うからです。

はじめのうちは、せいちゃんもふみちゃんもとてもとまどい、特にふみちゃんはせいちゃんにいつも受けとめられていたのに、「あっし（さおちゃんは自分のことをこう呼んでいました）はせいちゃんとやりたい。ふみちゃんはダメだよ」と言われ、ションポリすることもありました（この時のふみちゃんの支えとなったのは、みんなで飼っていたウサギでした）。

それでも三学期には次のようなやりとりがあったのです。

*

年少、年長でサッカー遊びをしていましたが、年少が部屋に入り三人だけになりました。

▼それぞれのおひな様が完成

左からふみちゃん、さおちゃん、せい

じくん

桃の花は大多和作です。

せいじ「じゃあ、今度はせいじ
が審判になるよ」

ふみことさおりの対戦となり、始
めは互角だったのですがふみこが先
にゴールし続けて二点とると、

さおり「あっし、やめる。ヤダ
よ」

ふみこ「ふみこがゴールしたか
らってやめるなんてずる
いよ」

せいじ「さおちゃんだってゴ-



ルするじゃん。やろう」

さおり「せいちゃんが、あっしの方に入ってくれたらやる」

せいじ「じゃあ、せいじ、さおちゃんのチームに入る」

ふみこ「ずるいよ、そしたら二人対一人になっちゃうよ、やだ」

さおり「じゃあ、やんない。ふみちゃんばっかしゴールして……」

ふみこ「じゃあ、せいじくん、さおちゃんチームに入っていていいよ。でも二対二になっ

たら、又審判になつてよ。それならいいよ」

せいじ「さおちゃんが、ふみちゃんチームと同じになったらせいじ、審判やるよ」

さおりはとてもうれしそうな顔になって、「わかった」

*

このようなやりとりをして遊ぶ三人に愛おしさが一杯でした。

(まこと幼稚園)



子どもの本から

おしおきまじりぞびくべんごすお

仲 明子

書店に並んだ数ある華やかな表紙の絵本の中から私が手にとったのは、白地に素朴な絵の描かれたこの本だった。以前にどこかで出会ったことがあるような懐かしさを覚える絵本だった。それは、アニタ・ジェラームの描いた絵からくるものかと思いついてみたが、彼女の描いたものを私は今までに目にしていないようだった。では、この絵本の何に私はひ

かれたのだろうか。

この絵本は、＼ちいさなちやいろのノウサギは、おやすみのじかん。おおきなちやいろいノウサギのながいみみにつかまって、ベッドへいくところ”という書き出しで始まる。ところが、その後の展開は、今まで私が出会った多くの、子どもを眠りに誘う絵本（眠らせ絵本）とは違っている。私はつぎの

二つはこの絵本の新しさを感じた。

まず、登場する二匹のノウサギの関係。この二匹は、幹が一抱え以上もありそうな大きな木やどこまでも続いていそうな明るい野原で暮らしている。一

◀『どんなに きみがすきだか あててごらん』

サム・マクブラットニイ文／アニタ・ジェラーム絵
小川仁央訳 評論社 一九九五年



方は小さく、もう一方はその何倍も大きく描かれている。二匹はこれから眠りにつくのだが、その会話から、親子や兄弟などの家族ではないらしい。さらに、身体の大きいものが小さいものを守るのでも、力のあるものがそのことで関係を有利にするのでもない、それぞれが、それぞれにできることを認め合う関係（身体の大小にかかわらず対等）に表されていることに気づく。

それは、そのほとんどの場面で二匹が相手を正面から見つめている構図で描かれていることにも現れているように思う。広がりをもって描かれた自然の大きさに対し、二匹のその目は、胡麻粒ほどの点にしか描かれていないが、私は、この見つめあう二匹にひかれてこの本を手にしたのかもしれない。

つぎに、眠ることを連想させるのが、他の絵本のように、月、星、ベッド、枕、タオル、ぬいぐるみなどの夜や眠りのための「もの」ではなく入眠に必要な「安心感」であること。

二匹は、前述の書き出しの後、明るい野原で、

“うでをのびしたり” “せいのびしたり” “さかだちしたり” “とびあがったり” “はねまわったり” “しれ、自分が相手を「どんなにすぎだか」表そうとそれぞれのできる限りをつくしている。私は、眠る前のこの動的な展開に、まずは戸惑ってしまった。

やがて、それが、“みちをずっといったかわ”や“おつきさまにとどくぐらい”と、それがどんなに遠いか二匹で見るといふ静的なものに移っていったとき、幼い者にとって「ねむい」気持ちと「すぎな」気持ちはいつも一緒にあるのかもしれないと思った。幼い者が眠りに入るとき、大好きな人にそばにいてほしい。この絵本は、互いに好き同士だといふ「安心できる関係」をくりかえしくりかえし描くことで幼い者を眠りに誘っているのだと気づく。

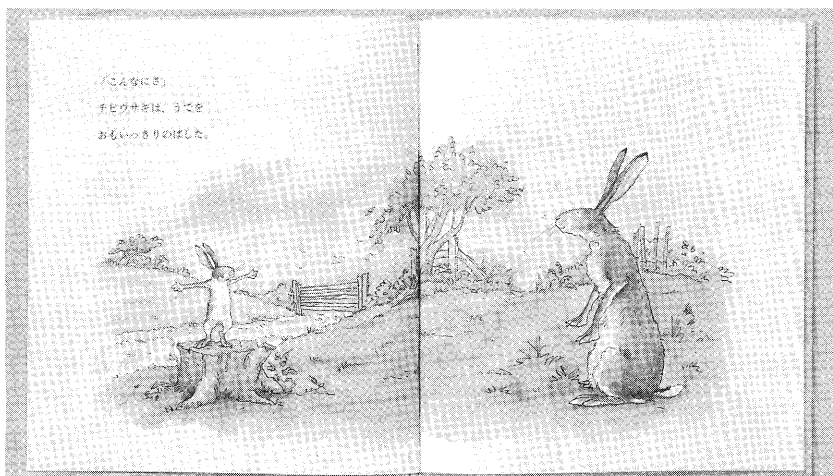
見るものを安心させる関係がこの絵本には描き出されている。そのことが、眠る前の子どもだけではなく、初めて見た私をも見覚えのあるような懐かし

い気持ちにさせたのであろうか。

この絵本は、眠る前の子どもとだけではなく、ことばを覚え始めた子どもたちと一緒に開いてみたい本でもある。

ここでテーマになっている、「相手に好きな気持ちを伝えること」は誰にとっても難しい。とりわけ、「誰にも負けないくらいいいっぱいすぎ」、とその「いいっぱい」を伝えることは。

では、実際、ことばを覚え始めた子どもにとつて、「いいっぱい」はどのように言い表されるのだろうか。一歳八か月のLに聞いてみる。朝目覚めてすぐ、まだ私の布団の中にいるLに、「おかあちゃんすぎ?」「シュキ」「どのくらい?」……しばらく沈黙の後、「フタチュ」。さらに、踏切に電車を見に行つての帰り道に、「電車、何台見たの?」「フタチュ」。どうやらこの時期のLにとって、「いいっぱい」は数も量も「フタチュ」の一言で表されるようだ。



▲「こんにちは」チビウサギは、うてをおもいきりのぼした。

一方、この絵本では、「誰にも負けないくらい
 いっぱいすぎだよ」は、「きみのこと、せいのみ
 せいいっぱいすぎだよ」と自らの身体で具体的に表
 されたり、おつきさまのように「（実際行けない）
 はるかに遠い」こととして小さいノウサギの口から
 語られたりしている。

二匹のノウサギの展開する、このような「いっば
 い」のいろいろな表し方との出会いは、子どもたち
 に豊かなイメージの世界をもたらすことであろう。
 このように、絵にも文にもあふれる魅力に、私は
 ひかれたのだと納得した。

（舞々同人）

編集後記

小学校の図工展に行きました。どの学年の作品も、それぞれに見るものを楽しませてくれました。

その中であって、ビー玉の迷路を工夫した三年生の「ビー玉の大ぼうけん」は、既に壊れそうな作品も何点もあり、一つのビー玉を巡っての子どもたちの試行錯誤の後が窺え、それらが「見せる」ためだけに作られていないことを語っていました。

スタートやゴールの仕方を考える、曲がり道・渦巻き道・坂道などの通路をいろいろな材料で工夫する、トンネルやその中の迷路など見えない通路を取り入れる、さらには、落とし穴やくぐり穴も加える、

などなど。二つと同じもののないその作品群に感心しました。

Nも三年生のとき、この迷路のための設計図を家で描いていました。「この辺から始めて、ここは見えなくするんだけど、迷路も作る。だから、勘でやらなくちゃあ。で、『スタートへもどる』がこの辺にあつて、……ビー玉入れ、どうしようかな。ま、いいっか。置いとけばいいや」。この独り言を聞いて、たった一つのビー玉がこんなにもイメージを膨らませることに驚かされ、思わずその言葉を書き留めていました。

さらに、今回の、試行錯誤だけでなく、出来上がるまでに思わず遊んでしまったに違いない作品群に、ビー玉が子どもたちの遊び心をくすぐる優れた材料であることを、具体的に見せられました。

(A)

幼児の教育

第九十七巻 第三号

(一九九八年三月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十年三月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二丁目

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五丁目

発売所 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一一四一丸

☎〇三―五三九五―五六六一三(営業)

☎〇三―五三九五―五六〇〇四(編集)

振替 〇〇―一九〇―二一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いします。

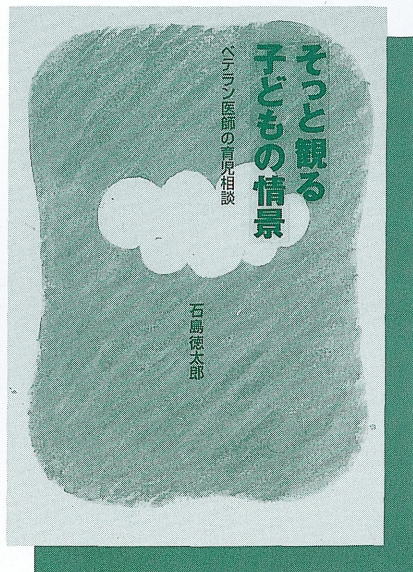
☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

子どもの世界が見えてくる
児童精神科医30年の育児相談を通して語る子どもの真の姿

そっと観る子どもの情景

◆好評発売中◆

親や大人は子どもの遊びの意味を取り違えがちです。真の子どもの内側の意味がわからないと、いろいろな問題を解決できません。こうした事例22話を取り上げ、育児相談30年のベテラン児童精神科医が子どもの問題を解明してくれます。



石島徳太郎・著

B6判・200頁・定価：本体1,800円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

たくさんの夢と感動が生まれる保育絵本

絵本からたくさんの発見、驚きや話し合いが生まれるように編集しています。
幼児の発達や保育のねらいに合わせてお選びください。



総合絵本

季節、生活、お話、歌のページなど、月々の保育活動に合わせて構成されています。

キンダーブック①



豊かな情操を育む年少児向け総合生活絵本。

定価350円(本体333円)
対象年齢 1②③④⑤

キンダーブック②



感動する心や好奇心を引き出す年中・年少児向け総合生活絵本。

定価400円(本体381円)
対象年齢 1②③④⑤

キンダーブック③



自然や社会観察を通して体験への活動を生む年長・年中児向け総合生活絵本。

定価410円(本体390円)
対象年齢 1②③④⑤

がくしゅうおおぞら



ことは、文字、数量などの基礎を学び、考える力がつく年長児向け総合学習絵本。

定価420円(本体400円)
対象年齢 1②③④⑤

お話絵本

幼児の気持ちをはきつけ、バラエティーに富んだ楽しいお話を毎月お届けします。

ころころえほん



遊びや楽しい会話が生まれる年少児向けスキミング絵本。

定価350円(本体333円)
対象年齢 1②③④⑤

キンダーメルヘン



さまざまな楽しい絵本と出会える年中・年少児向けお話絵本。

定価350円(本体333円)
対象年齢 1②③④⑤

科学絵本

身近な自然を、リアルイラストレーションと迫力ある写真で深く掘り下げ、その驚異を感動的に伝えます。

しぜん-キンダーブック



自然に親しみながら科学する心が育つ年長・年中児向け科学絵本。

定価460円(本体438円)
対象年齢 1②③④⑤

キンダーおはなしえほん



「おもいやり」をテーマに年長・年中児の心を育てるお話絵本。

定価370円(本体352円)
対象年齢 1②③④⑤

おはなしえほんベストセレクション



年長・年中児向けロングセラール「おはなしえほん」傑作集。

定価330円(本体314円)
対象年齢 1②③④⑤

キンダーブックの フレール館